

## 大学院生発表奨励賞 講評

該当報告計 19 本を計 16 名の委員で審査した。その結果をもとに 3 名の審査委員によって審議し、もっとも高い評価を得た報告に最優秀賞、次点の報告に優秀賞を授与することにした。

### 受賞報告

遠藤理一

兵士から観光客へ

— 占領期日本におけるアメリカ陸軍によるツーリズムをめぐる政策を中心に

### 講評

とにかく（学術的に）おもしろい、キラリと光る発表であった。

本発表は、第二次大戦終了後のアメリカ軍による日本占領期に、アメリカ軍兵士がレクリエーションの一環として日本各地を観光したことの理念や実戦から、占領期日本社会をグローバル・ヒストリーに位置づけようと試みるものである。

先行研究では、占領期、日本の観光業が米軍に対してどのような事業をおこなっていたのかについては論じられているが、なぜ米軍が観光を企画したのか、米軍に観光をめぐるどのような制度や組織があったのか、それが世界各地における米軍の動向といかに関連していたのかなどについては十分に論じられていなかった。

こうした状況を踏まえ、具体的には、1.なぜ米軍は観光を企画したのか、2.米軍には観光をめぐるどのような制度や組織があったのか、について考察を進めていった。

本発表では、1.の問いに対しては、①観光することで兵士が当該地の文化を学び教養を身につけること、②米兵による友好的で規律のとれた姿を日本人に提示すること、という点を明らかにしている。

また2.の問いに対しては、第8軍スペシャルサービス司令部がレクリエーション事業を展開し始めたことと、アメリカ赤十字社などが協力していたことを指摘しつつ、これが、①（アメリカが）多額の税金を費やしていることを国内外に正当化することの一助となっていた、②（アメリカ国民へ向けて）占領が現地社会に歓迎されていること、③軍役が教養を高めることに一役買っていること、④兵士達が祖国から遠く離れた地で健康に生活していること、などのPR機能があったことを明らかにしている。

本発表の秀逸な点は、なんといっても「兵士」を「ツーリスト」に再定位するという発想の斬新さにある。さらにまた、こうした米軍による日本観光が、戦後日本のツーリズムの素地を作ったことも指摘しており、単に占領期の日本社会とアメリカ社会の研究ではなく、その射程には現

代日本社会に生きる「私たち」までをも含めている。

問題設定のユニークさ、明快で整然とした論理展開と視野（研究の射程）の広さ、研究者としての独創性など、豊かな将来性が伺える。

以上の理由から、本発表に最優秀賞を授与する。